

〈特別寄稿／Special Contribution〉

大学院創立期のころの基盤作りと運営

The Basics and Administration in the Graduate School Foundation Period

都留文科大学名誉教授 元研究科委員長 (平成 9 ～ 12 年度)

高橋 宏幸

Hiroyuki TAKAHASHI

Tsuru University Emeritus Professor

平成 7 年、多くの教員・職員の方々の協力により、取りあえず国文学専攻と社会学地域社会専攻の 2 専攻でスタートした大学院は、平成 15 年 4 月臨床実践学専攻の設置により完成をみました。平成 6 年度末の 2 専攻での第 1 回の入試は、先生方の努力もあって志願者も 2 倍を超え、選考の上 11 名の大学院生を迎えることができました。完成年度の 2 年目には少し減りましたが選考して 11 名、併せて大学院修士課程 22 名という定員を超える順調な船出でした。私は平成 9 年度から 12 年度までの 4 年間研究科委員長の任にあたりました。2 年間の完成年度が過ぎ、いよいよ実質的な運営が求められたときに当たります。そのとき手がけた事柄を記してみますが、20 年も以前のことでその誤解している点などあるかとも思います。

設置後 2 年が過ぎたので、カリキュラムの改訂、院担当教員の審査を独自に行えることとなり、カリキュラムについてはこの 2 年間の教育を踏まえて必要な改訂をそれぞれの専攻にお願いしました。入試制度もカリキュラムも、現在では 3 ポリシーとした大学院設置目的に沿っているかを常にチェックする必要があると思います。

また、設置の目的の 1 つでもある「現職教員を受け入れて再教育する」ということですが、そのためのカリキュラムを立て、山梨県教育委員会に本学大学院も現職教員の進学大学院（国内留学）に指定してほしい旨、当時の大学院担当の小林和夫課長補佐とお願いに伺いましたが、予算がないので文科省と交渉してくれということで、楠元六男教授と文科省定員課に行き依頼したところ、県からの申請があれば考慮するという言質を戴き、再度県に行き 3 名の枠を認可され、次の年から現職教員を受け入れることができました。最近、本学（大学院）で学ぶ現職教員が少なくなっているのは、本人の志望がないのか、県教委の意向か、調べる必要があるように思います。教員をやっている卒業生が本学大学院を志望しても山梨大学を薦められたということを仄聞したことがありますので。

一方、院担当教員の審査についてはその規準作りから始めました。設置に当たっての基準がどのようなものだったのかを、カリキュラムの担当科目に対する丸合・合・不適

の教員の業績、教育履歴などからおおよその基準を帰納するとともに松本四郎教授から某大学院の規準のコピーをいただき、それらを参考にして、本学の審査を受けて院担当になれば、どこの大学院の非常勤講師の審査も通るというレベルを目指した規準にしたつもりです。

なお、大学院は学部とは別組織であるから、学長とは別に研究科長が選ばれ、大学院準備室長だった松本教授が研究科委員長と併任なさいました。しかし2年後、任期満了にともない、小規模大学の大学院だから研究科長と学長は兼任するという話になっているという山本安夫大学院準備室員の発言により、独立した研究科長は初代だけでありました。そこで、学長が兼任しても実質的に運営までは難しいということで、研究科委員会の長が実質的な運営を図ることになりました。

院は、担当部署もはっきりせず、担当教務職員もいないという状況でした。担当部署は設置に関わったということで総務課（直接の責任者は課長補佐）と決まり、教務もカリキュラム改訂や修了要件の変更など、学部の片手間では無理になり職員を特定してもらいました。

2専攻の時は判断事項も少ないので学長及び専攻主任と相談しながら進めて来ましたが、平成9年4月に久保木哲夫元教授を学長に迎え、主に中村一夫教授と今井隆教授の奮闘努力により平成10年度英語英米文学専攻を増設し、また平成12年度には福田誠治教授のお骨折りで比較文化専攻を増設しました。委員長として両者の準備室員となりそれぞれの苦労を見てきました。4専攻と院の規模が大きくなったので、今まで研究科委員会といっても委員長と各専攻主任だけであった委員会の組織化・事務分掌が必要となりました。そこで入試、教務、図書、厚生、紀要委員などを各専攻から出し、また事務局長を始め各課長も出席することとして、研究科委員会を教授会に並ぶ審議、議決機関としました。

大学院設置の「第一の理由が研究と教育の質を高めること」（福田誠治研究科長・本紀要第20集）であるから、その具体的な方法として大学院と学部とは並立（独立）する立場であると考えました。その第一は、院生は学部の五年生六年生ではないという自覚を持つこと、教員は学部の教育を踏まえて院としてのレベルの授業を行うことです。そのため学部と院の合併授業は行わないこと、院生の自主的研究を後援することなど、細々と指示も出しました。

また「大学院紀要」を創刊しました。すでに大学の紀要があるのに屋上屋を架すようなものだという意見もありましたが、これは、院生および院修了生に発表の場を提供したかったからです。院生のレポートの中で秀れているものや教員との共同研究（本学は遅れているとの指摘により新規予算化した）、修士論文の学界への発表の場として、そして、院担当教員がどのような専門性を持っているか、如何なる研究を行っているか、その実態を本学学生はもちろん他大学生にも知らしめることを目的としたものです。創刊に当たっては印刷所の選定、装幀、表紙の色、国文と社会だから右披きとし、裏表紙にも目次を入れる、どこの大学院、図書館に送るか、など一切を小林課長補佐と2人で決めていきました。発送は最初総務係にお願いしましたが、大学紀要と一緒に図書館で扱ってくださるというので大変助かりました。

「大学院概要」も発刊しました。2年ごとに発行し、内容はこの2年間の各専攻の授

業概要、修士論文のタイトル、研究科委員会の審議事項、入試関係のデータなどを載せました。後に参加した大学評価の資料になったことと思います。

「飛び級」の制度も設置しました。希望する学生の指導の先生から相談され、当時高校からの飛び級で大学に進む例が多くあり、優秀ならそれもあるかなと思い、かなり厳しい条件を内規として受験資格を広げました。幸い英文学科の学生が条件をクリアして受験し、トップで合格しました。修士修了後は都立大学（首都大学東京）の博士課程に進んだと聞いています。なお、修了時に教員専修免許状の申請をしましたところ、学部を卒業していないので出せないと言われ、まったくそれは想定外だったので困りました。飛び級の時は大学は中退扱いになるからと説明してはありましたが免許状までは考えていなかったというのが本音です。そこで当時の河口教務課長に教育委員会と折衝していただき、あくまでも今回限りの例外とすることで認めてもらいほった次第です。

手がけたけれど結果的にうまくいかなかったことは「院独自の奨学金制度」でした。課長補佐が都留市出身の財界人に協力を得るところまで話は進んだのですが、最後に反対する人が出て結局その計画はだめになりました。院生は親御さんの立場から見ればさらに2年間学費を支払わなくてはならないことになり、本人もなるべく負担を掛けないようアルバイトに時間を費やすことになって学習・研究の時間を割くという本末転倒を招くことになります。そこで考えた案ですが思わぬ所からの反対でだめになり、残念でした。そこで学生委員会に交渉して育英会の奨学金選考に大学院生の枠を作ってもらうこと、すなわち選考に当たっての要素を学部学生と等し並みにしないことなどを検討してもらいました。その後、ティーチング・アシスタント制度、リサーチ・アシスタント制度、あるいは院生を大学でアルバイトに雇っていただくなど院生らしい仕事で経済的にも補助になる制度、工夫を次期委員長の窪田憲子教授が推し進めました。

「博士課程の設置」も考えました。修士課程だけというのは中途半端で博士課程前期にもならない、修了後他大学の大学院に進む者、最初から博士課程までである大学院に進む者などを教育したい、慣れた場所で研究に専念させてやりたい、と思ったからです。4専攻一緒というわけにはいかないが、1専攻からでもスタートさせられないかと考えあれこれ相談しましたが、いろいろな面で整わないということで断念しました。

また、「大学院担当手当」を特別手当扱いするか、俸給の割合にするかでは、ずいぶん交渉しましたが結局特別手当として扱うことになり、代わりに院の授業を担当コマ数に含めることにしました。ただそれも専攻によって考え方に違いがあり統一できませんでしたので、外に出した専攻の中には不満を持つ人もいました。又授業を開講したが受講生がいらないという事態にどう対応するかも課題でしょう。そんなことが生じないよう、他大学からの受験生を含め院生を増やす努力が尤も必要でしょう。

創立ということは何もかも新たにやるということで、課題が発生する度に規定や内規を作ったというのが実情の時代でした。まだほかにもあったように思いますが、それはともかく、その時の課題は全員の共通理解でしたので細かなこのケースあのケースまで考えることも必要なく、作った精神で処理してきましたが、時代が経つにつれ精神が忘れられ細々としたことまでどうするのかを決める必要が生じて、その結果、骨抜きになりかねないものも見受けられます。20周年に当たり、言うなれば、初心忘るべからずということでしょうか。